
 学 会 記 事

第27回新潟大腸肛門病研究会

日 時 平成3年6月1日(土)
会 場 ホテル新潟

一 般 演 題

1) Cronkheit-Canada 症候群の1例

長谷川 毅・斎藤 征史
加藤 俊幸・丹羽 正之 (新潟県立がんセン)
小越 和栄 (ター新潟病院内科)

症例は63歳男性。平成2年9月より1日5回程度の下痢、味覚及び食欲低下、脱毛、爪甲の萎縮、色素沈着が出現し、精査目的で同年10月8日当院受診した。頭部の脱毛、四肢の爪甲の変形萎縮、指趾の色素沈着、低蛋白血症と、胃及び大腸にはポリープがび慢性に認められ、Cronkhite-Canada 症候群と診断された。抗線溶療法として tranxamic acid 1,500 mg と Camostat mesilate 600 mg を投与した。投与後下痢、脱毛、爪甲の萎縮、色素沈着について改善がみられ、ポリープもほとんどが消失した。以上、抗線溶療法が著効した Cronkhite-Canada 症候群の1例を経験したので報告した。

2) 潰瘍性大腸炎におけるT細胞とサイトカイン

笹川 哲哉・滝澤 英昭
坂内 均・成澤林太郎 (新潟大学第三内科)
朝倉 均

潰瘍性大腸炎(UC)には免疫異常の関与が想定されているが、活動期 UC の大腸生検組織に対し、抗 Leu 2a 及び 3a 抗体と抗 HLA-DR 抗体を用いた蛍光二重染色を行い、血清中の IL-6、TNF、可溶性 IL-2 レセプター (sIL-2R) を測定した。UC の粘膜固有層内の Leu2a+ 及び Leu3a+ 細胞数、DR+ の Leu3a+ 細胞は増加し、Leu3a+ 細胞数/Leu2a+ 細胞数の比も上昇していた。活動期 UC の腸上皮には高率に DR 抗原の発現を認めたが、上皮が DR- で Leu3a+ 細胞の活性化率の高い症例は未治療で増悪期の例に多かった。IL-6、TNF、sIL-2R はいずれも増加し、IL-6 は増悪期で特に増加していた。Leu3a+ 細胞の活性化率と sIL-

2R 及び IL-6 には正の相関も認めた。UC の活動早期には大腸粘膜固有層内で Leu3a+ 細胞を主とする T 細胞が活性化され、IL-6 の産生も亢進していると考えられた。

3) 回盲部単純性潰瘍に対する栄養療法の効果

月岡 恵・藤田 一隆 (新潟市民病院)
何 汝朝・市井吉三郎 (消化器科)
山本 陸生・斎藤 英樹
丸田 有吉 (同 第一外科)

回盲部単純性潰瘍患者3例に対して栄養療法を行い、その治療効果を検討した。対象症例の年齢は28歳から38歳。男性2例、女性1例。本症のための過去の腸切除歴は6回、2回が各1例、1例は初発例。全例が初発時盲腸に下掘れの深い潰瘍をきたし、病理組織診断は非特異性潰瘍であった。1例は中心静脈栄養と経腸栄養剤の併用、2例は経腸栄養を行った。初回治療では全例が4カ月以内に腹痛が消失し、潰瘍は瘢痕化した。2例は経口摂取により再燃が確認された。うち1例は再治療により潰瘍の緩解導入が容易であったが、他の1例は再治療の効果が不十分で治療に難渋している。2例は栄養療法の離脱が可能で現在経過観察中である。

4) 当院における痔瘻の傾向

一型別・治療法・炎症性腸疾患との関係を中心に—

川原 薫・吉田 鉄郎 (吉田病院外科)
山口 正康・永田 邦夫 (吉田病院内科)
渡辺 英伸 (新潟大学第一病理)

平成元年4月から、平成3年3月までの2年間に、当院で痔瘻の手術を行なった309例について検討した。性比は288:21で男性に多く、30才代にピークがあった。26例の重複痔瘻を含め、332の痔瘻中、低位筋間痔瘻(ⅡL)が280(85.3%)。坐骨直腸窩痔瘻(Ⅲ)が46(13.9%)とこの両者で大部分を占めた。手術法は、後方のⅡLには開放術式、前方及び側法のⅡLには括約筋温存術式、Ⅲには、肛門保護手術を行った。同期間にクローン病と診断された症例は7例で、他院でクローン病疑いと診断されていた一例をのぞき、全て肛門膿瘍をきっかけとして来院し、精査の結果クローン病と診断されたものであった。